

令和の倉敷型学校教育をPBI S（倉敷モデル）で実現する

倉敷市立西中学校長 松本一郎

中央教育審議会は、『令和の日本型学校教育』を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現～』を答申しました。（令和3年1月）現在の生徒たちは、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来、また、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」を生き抜かなければなりません。

「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができる」よう答申の「第I部総論 1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力」のなかで述べています。私たちは新教育課程を着実に実施し、その期待に応える必要があります。

そこで、本校では、その期待に応えるために、令和元年度からポジティブな行動支援（倉敷モデル）に取り組んできました。（以下、倉敷モデルとする。）この倉敷モデルとは、米国で実践されているポジティブな行動支援（PBI S /PBS）の一次的支援に解決志向アプローチを組み合わせた全国的にも例を見ない実践です。生徒の適切な行動を増やすことによって、問題行動を未然に防止するため、先生から生徒に渡されるグッドビヘイビアカードの取組としてスタートしました。もともと担任は、毎日、生活ノートに共感と励ましのメッセージを書いていましたので、親和性は高い取組でした。生徒の喜ぶ姿に先生方も励まされ、1年で約6,000枚のカードが活用されました。

その後、生徒の声から生徒用のカードを作成し、現在では、グッドビヘイビアカードを書くことができる生徒を育成することに重点を置

いています。生徒同士が互いの行動や言動のよさに気づき、感謝のメッセージとともにカードに書く力は、繰り返し機会を設けて習得していくものです。令和2年の2学期には、生徒会が主催し、毎週木曜日をグッドビヘイビアの日として、帰りの会を5分延長してカードを書く取組を行いました。令和3年度は、12月の人権週間に一人2枚のカードを書く取組を全校で行いました。追加のカードを求める生徒が多数出てきたことから、カードを書くスキルと意欲が高まっていることが証明されています。

さて、本年度の研究テーマは、倉敷モデルの考え方を学習指導（授業）に応用することです。ポジティブな行動支援の考え方を授業に応用する取組については、すでに、徳島県において先行的な実践が紹介され、児童生徒への効果ばかりでなく、授業者である教員の授業スキルと意欲の向上が指摘されています。（「ポジティブな行動支援 実践事例集I」令和3年3月 徳島県教育委員会）

そもそも、学習活動は行動の集合であり、聞く、読む、書く、考える（内言）、発言するなどの行動によって成り立っていることは周知の事実です。ポジティブな行動支援の考え方で授業づくりをすることは、それらの適切な行動に着目し、ポジティブに関わる（認める・ほめるなど）ことで、聞く、読む、書く、考える（内言）、発言するなどの行動を増やすことです。生徒が主体的に活動する授業は、学習効果が高い楽しい授業といえると思います。

新学習指導要領において、評価の観点が「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点になりました。「知識・技能」「思考・判断・表現」は、試験で総合的に評価することもできますが、「主体的に

学習に取り組む態度」は、試験で評価することに向いていません。日々の学習活動を見取りながら、形成的に評価する必要があります。その意味から考えて、「知識・技能」「思考・判断・表現」を認知的能力、「主体的に学習に取り組む態度」を非認知的能力と位置付けることが可能であると考えています。

そもそも、今回の学習指導要領の改訂で、今までの「関心・意欲・態度」に代わって、「主体的に学習に取り組む態度」が入ってきた背景を確認しておきたいと思います。OECD（経済協力開発機構）は、OECD Education 2030 ラーニング・コンパスを発表しています。（令和元年5月）そこでは、学習者の資質・能力をキー・コンピテンシー（コンピテンシー）と表現し、認知的能力と非認知的能力の一体的成長を求めています。さらにOECDは、非認知的能力のことを「社会的情動スキル」と呼び、「学びに向かう力」として重視するとともに、国際比較調査も行い刊行しています。（「社会的情動スキルー学びに向かう力ー」ベネッセ教育総合研究所、明石書店、2018）

このように、新学習指導要領の成立には、OECDの描く教育の未来像（「ラーニング・コンパス」）が、大きな影響を与えていることが分かります。また、子どもの人生に大きな影響を与える非認知的能力を育むために「主体的に学習に取り組む態度」が設けられたとも考えられます。

非認知的能力とは、幅広い能力であるので一言で定義することは難しいですが、無藤隆は、「社会的情動スキル（非認知的能力）は、粘り強く取り組み、困難な課題に挑戦し、人と協力して成し遂げ、また、見通しを立てて取り組むとともに、自分の感情をコントロールする」ことであると述べています。（前掲、「社会的情動スキルー学びに向かう力ー」はじめに）また、冒頭の答申「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、・・・」も、

非認知的能力の重要性を述べているともいえます。

さらに、もっと分かり易く言うならば、指導要録に記載されている行動の10個の観点は、非認知的能力そのものだと思います。私たちは、以前から非認知的能力を重視し、生徒の生きる力として評価してきました。

私たちが実践を進めている倉敷モデルは、まず、生徒同士の間関係を良好にするために働き、安心して学ぶことができる環境づくりを可能とします。先生からのカードであっても、生徒同士のカードであっても、もらった生徒から、「こんなところまで見てくれているんだ。」という感想をよく聞きます。このポジティブな気持ちで、陰で行われる不適切な行動を抑止する効果を発揮すると考えています。

まさに「教室は、間違ふところ」ですので、安心して居場所がある学級では、積極的に挑戦する雰囲気生まれます。非認知的能力に起きる小さな変化が、教科の学習という認知的能力にも大きな変化を生むことを証明したいと思います。非認知的能力と認知的能力は一体的なものであり、グッドビヘイビアカードがある環境という小さな変化が、学力の向上という大きな変化へと、雪だるま式に増幅させる道筋は、倉敷モデルのベースとなる解決志向アプローチの考え方をもとにしています。

私たち教師の仕事は、生徒に各教科の面白さを楽しく教え、生涯に渡り学びに向かう力を育むことではないでしょうか。先生方が、倉敷モデルの考え方を縦横無尽に活用し、授業をはじめ様々な教育活動に取り組まれた成果が、この研究集録に詰まっています。倉敷モデルという考え方と目指す方向性は同じでも、具体的実践の在り方は各クラスで、各学年で、また、各教科でヴァリエーションにあふれています。本校の一番の強みは、このような先生方一人ひとりの創意工夫にあります。これこそ、倉敷モデルが成功する最大のポイントです。